

「復興エコツーリズム推進モデル事業」の紹介 — 浦戸諸島での取り組み

公益財団法人日本交通公社 観光文化研究部 研究員 門脇 茉海

環境省は、東北地方太平洋沿岸地域において、三陸復興国立公園の創設やみちのく潮風トレイルの整備をはじめとする、「グリーン復興プロジェクト」に取り組んでいる。自然の上に成り立っている地域の暮らしや文化を次の世代に伝え、自然の恵みと脅威を学びつつ、それらを活用しながらの復興を目指すものである。この「グリーン復興プロジェクト」の柱の一つとして、二〇二二年度（平成二十四年度）から実施しているのが、「復興エコツーリズム推進モデル事業」である。

本事業は、被災地において、地域関係者の合意形成を図りつつ、地域資源を活用したエコツーリズムの推進に取り組むことで、

- ① 自然環境の保全
- ② 交流人口の拡大による地域活性化
- ③ 震災体験の継承による環境教育の推進や災害に強い地域づくり
- ④ 地域の絆の再構築
- ⑤ 主要産業である農林水産業の復興

といった地域の姿を実現し、これら

図1 「復興エコツーリズム推進モデル事業」5つのモデル地区



資料：環境省資料を基に公益財団法人日本交通公社作成

を通じて震災からの復興に貢献することを目的としている。

モデル地域には、岩手県久慈市・洋野町、岩手県山田町、宮城県気仙沼市（唐桑半島）、宮城県塩竈市（浦戸諸島）、福島県相馬市（松川浦）の沿岸五地域（図1）が選定されており、各地の実情に合わせた多様な取り組みが進展している。

当財団は受託事業者として事業開始当初から携わっており、これまでに五地域それぞれで自然観光資源の調査、コーディネートやガイド人材の育成、エコツアープログラム

の検討、モニターツアーの実施、情報発信などに取り組んできた。

私は、二〇二三年（平成二十五年）四月に当財団に入社して以来、この事業を中心に取り組んでいる。二〇二三年度からは久慈市と洋野町を担当し、二〇二四年度（平成二十六年）からは浦戸諸島にも通っている。まだまだ分らないことが多く、戸惑うこともあるが、地域の奥深い魅力に出会うたびに、この仕事に携わることができて本当に良かったと心から感じている。本稿では、浦戸諸島での私の体験を基に、本事業に

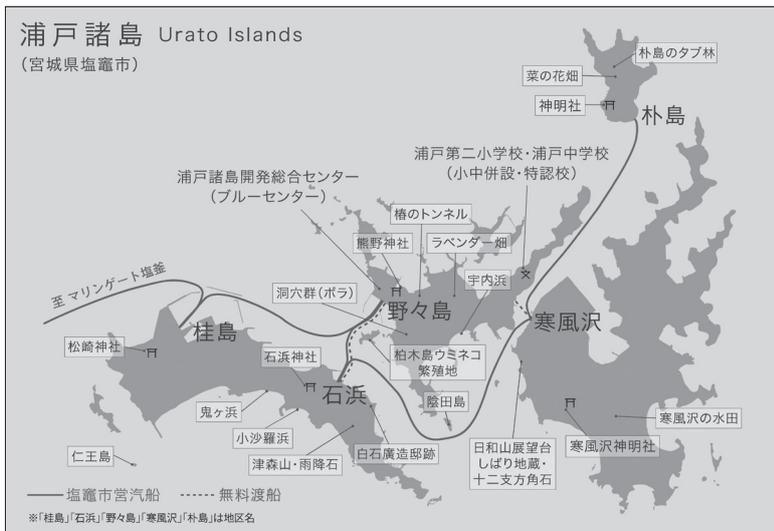


図2 『浦戸諸島 エコツーリズム・ガイドブック〜うらとのウラガワをのぞこう!』裏表紙

取り進む地域の様子を、地域に接する中で私自身が感じたことと併せて紹介したい。

浦戸諸島とは

浦戸諸島は、鹽竈神社で全国的にも有名な宮城県塩竈市に属し、四つの有人島と大小たくさん無人島

から成る島々である(図2)。浦戸諸島の最大の特徴は、日本三景松島の一部を構成していることである。今も昔も多くの人に愛されている日本三景松島の風景のその中に、浦戸諸島は存在している。四つの島は、桂島・石浜・野々島・寒風沢・朴島という五つの地区に分かれており、各地区の区長さんが地区全体を



写真1 浦戸を代表する産業
海苔養殖の作業風景
(筆者撮影)

写真2 “海の畑”を縫って
浦戸諸島に向かう
(筆者撮影)



まとめている。仙台からはJR仙石線と市営汽船を乗り継いでも、わずか約一時間。東北新幹線はやぶさに乗れば、東京からでも約二時間半しかかからない。私が初めて市営汽船に乗った時に強く感じたのは、日本の海にもいろいろあるのだなということだった。久慈市や洋野町で見られる花崗岩で

できた荒々しい海岸と外海の風景に慣れてきた私には、浦戸諸島の凝灰岩でできた優しい島々と穏やかな内湾の風景は、海というより湖のように感じられた。島に渡る途中、海面から突き出ている無数の竹の棒が目飛び込んできた(写真1)。水深が非常に浅い浦戸諸島近海では、カキ養殖や海苔養殖といった浅海漁業が盛んに行われている。無数の竹は海底に直接立てられていて、海苔養殖に使われるのりひびだということを、先輩研究員に教えてもらった。湖のような海の中でさまざまな養殖が行われている様子を見て、まさに“海の畑”だと思った(写真2)。

日本三景松島に属しているということ、東北最大の都市である仙台から約一時間の立地であることは、浦戸諸島の大きな強みだろう。こうした強みを生かしながら、地域の奥深い魅力を守り伝えるエコツーリズムに取り組むことで、浦戸諸島における既存の産業の活性化にもつながるとよいと考えた。

ギャップから生まれる面白さ

まず、昨年度の取り組みから紹介を始めた。

エコツーリズムを地域に根付かせるためには、地域の方自身が自分の地域の魅力に気づくことが大切である。浦戸諸島においても、「浦戸がいかにも面白い土地なのか」を、島の方に気づいてもらうことから取り組み

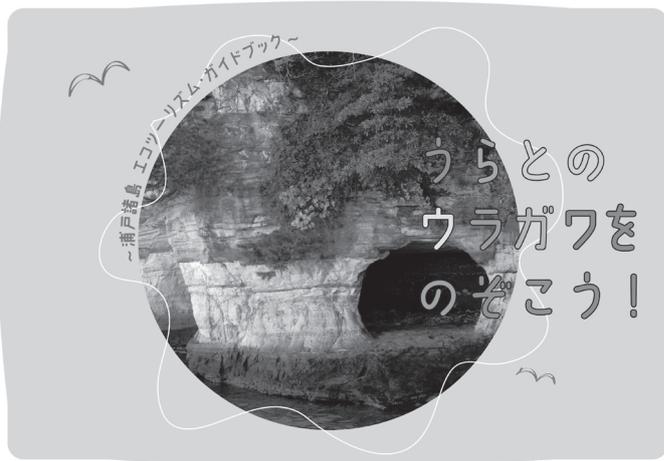


図3 『浦戸諸島 エコツーリズム・ガイドブック〜うらとのウラガワをのぞこう!』表紙
(発行:環境省、協力:塩竈市、塩竈市立浦戸第二小学校・浦戸中学校、編集:公益財団法人日本交通公社 高橋葉子)全36ページで、http://www.env.go.jp/jishin/park-sanriku/urato_book.pdfからダウンロード可能。



写真3 海苔の乾燥小屋
(高橋葉子撮影)

みをスタートさせた。具体的には、エコツーリズム的な視点で島を読み解くためのコツを伝えるガイドブック『浦戸諸島 エコツーリズム・ガイドブック〜うらとのウラガワをのぞこう!』を作成し、全島民に配布したのである(図3)。

このガイドブックのポイントは、子どもたちから見た島の面白さという切り口で島の魅力をまとめたことである。

島の学校に通う子どもたちは、ほとんどが島外から通っている。また、過疎化が進む浦戸諸島において、子どもたちは島の宝としても大切にされている。そのため、子どもたちの声をヒントにすることで、日常生活

の中に隠れた浦戸諸島の魅力を発掘でき、かつ島の大人たちにも受け入れてもらえると考えたためである。

子どもたちがどのような目で島を見ているのかを知るため、島の小・中学校に通う子どもたちへ、「私が島を案内する特別な一日」と題したグループインタビューを行い、家族や友人など、大切な人を案内したいおすすめの場所を挙げてもらった。

すると、島で長年暮らしている方にとっては当たり前のことでも、子どもたちにとっては不思議に映っていることがたくさんあると分かった。例えば、島内のあちらこちらにある石造りの小屋。子どもたちは自転車置き場だと思っていたそうだが、実はこれ、海苔養殖が最盛期を迎えた昭和四十年代に、効率良く海苔を



写真4 熊野神社の鐘(高橋葉子撮影)

乾燥させるために重宝された海苔の乾燥小屋である(写真3)。

また、私たちのような地域の外の人の目で見ること、地域の特殊性が明らかになることもある。野々島の熊野神社には、神社であるにもかかわらず鐘突き堂がある。神仏習合の名残を伝えるものだが、「除夜の鐘を突きに神社に行く」という、東京の人間にとっては不思議なことも、そう指摘されるまで島の方にとっては何の疑問も抱かない当たり前のことだった(写真4)。

自分にとっての常識が、別の人にとってはそうではないという、ギャップから生まれる面白さの視点も加えて、このガイドブックはまとめられている。

ガイドブック完成後、お披露目会

として「うらとのウラガワをのぞこう！～地域の宝の見つけ方～」を開催した。島の参加者からは、「普段から見慣れているものでも、冊子にすることですごく新鮮さを覚えた」「住んでいると当たり前なのに、外の方にとってはこんなにも疑問に思うことがあるのかとびっくりした」「初めて知ったことがたくさんあった」といった感想が聞かれた。

このように、浦戸諸島における本事業は、「ほんの少し見方を変える」と浦戸諸島はもっと面白くなる」とを伝えることからスタートした。

三つの取り組み

私が参画した今年度は、塩竈市教育委員会、島の学校、塩竈市浦戸振興課とともに、

- ① 夏休みの勉強合宿*との連携
 - ② 総合的な学習の時間*との連携
 - ③ うらとのウラガワツアーの実施
- という三つの取り組みを中心に事業を進めることとした。

①「勉強合宿における『浦戸学習の時間』の内容を強化したい」

②「演劇活動の事前学習にガイドブックを活用し、子どもたちが島の方と一緒に地域資源の深掘りを行う仕組みを作りたい」

③「黄色いガイドブックが好評だったので、ぜひ『うらとのウラガワツアー』を実施したい」

というように、いずれからも本事業との関わりについてとても積極的な要望をいただくことができた。ガイドブックを通じて、浦戸諸島の魅力が再発見されたからこそのことだったと思う。

*夏休みの勉強合宿：塩竈市内の小学校に通う小学四年生が対象。基礎的学習を中心としたプログラムだが、一部浦戸の自然や歴史を体験・学習する時間を取り入れている。

*総合的な学習の時間：島の学校では、総合的な学習の時間を使って、演劇活動に取り組んでいる。小学一年生から中学三年生まで、児童生徒全員が役者として舞台に立つ。脚本は浦戸諸島の歴史や文化が題材。

ダーツの旅？

地域資源をより魅力的にするためには、ただ概説的な解説をするだけでなく、地域の人でなければ語ることのできない体験談を加えたり、

全国の他の地域と比較して共通点や違いを見つかったり、地質と自然と生活をつなぎ合わせたストーリーを発見したりといった、地域資源の磨き上げが必要となる。

三つの取り組みを進めるにあたっては、島の方でなければ知らないような、人の暮らしに密着した面白い話をまとめながら、より上手に伝えるためのコツも少しずつ勉強していく講座の開催と、講座に参加していた方々を「島の達人」として掲載する人材リストの作成を考えていた。

昨年度の報告会では、ガイドブックをきっかけとしてさまざまな面白い話に花が咲いた。そうした面白い話をもっと引き出して、子どもたちに伝えていけるように整えようと考えたのである。しかし、浦戸諸島の事情を最もよくご存じの四島五地区の各区長さん、また学校の先生からは、「人を集めての勉強会や人材リストという無機質な進め方は、浦戸にはなじまないよ」というご意見をいただいた。

「勉強会(ワークショップ)」という地域資源の深掘りをする際の常套

手段が使えないと分かり、一度は落胆したが、個別に島の方に対して取材を重ね、島の方の面白い思い出話を集めることにした。それも、事前に訪問の約束をするということ自体、地域の方にとっては煩わしく感じられるというアドバイスをいただいたため、約束なしの突撃取材を行うことになったのである。私は、これから「ダーツの旅」に出るのだと思った。

お宅に上がり込んで、梅の実をいただく

最初に話を伺ったのは、朴島で浜作業中の女性だった。朴島の区長さんと今年度の取り組みの進め方について意見交換を行った後、早速、「その辺りで作業中の女性がいるはずだから、その人にお話を聞いてみたら」と紹介いただき、行ってみることにした。

カンカンと響く音をたどっていくと、ハンマーを持って何かを剥がしている女性に出会った。「去年この黄色いガイドブックを作ったのですが、この続きを作りたいと思っ

て島の方にお話を聞いているんです」と自己紹介すると、「ガイドブック、面白かったよ」と、にこやかに受け入れてくださった。

お会いした時は、カキ養殖に使ったホタテ殻から、カキ殻を取り外す作業の真っ最中だった。浦戸諸島でカキ養殖に使用しているホタテ殻はもともと北海道産で、そのホタテ殻を石巻の業者が買い取り、種ガキ栽培用に加工したものを使用しているとのことだった。はるか遠く北海道で育ったホタテが、殻だけとなって浦戸諸島で種ガキを育み、その種ガキが広島など各地で大きく育って

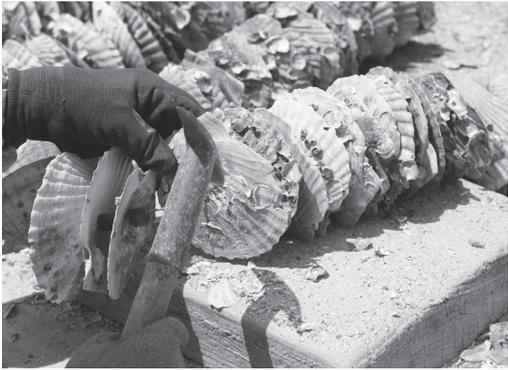


写真5 ホタテ殻からカキ殻を外して再利用(高橋葉子撮影)

るということに、知られざるつながりを感じて、私はとても驚き感動した(写真5)。

話が弾んでくると、初対面であるにもかかわらずご自宅に招いてくださった。自家製の青梅のシロップ漬けをご馳走になりながら、昔の菜の花畑は今よりもっと広がったこと、タネ採りの伝統を絶やしたくないと思っていることなど、たくさんのお話を伺うことができた。

八十年前の浦戸諸島の話をお伺う

野々島で暮らす九十代の女性にもお話を伺った。この時は直前に役場の方から電話を入れていただき、ご自宅まで押し掛けてしまったのだが、快くオロナミンCでもてなしてくれた。東日本大震災発生夜の夜、氏神様である「お観音さん」の隣で雪の中一晩を過ごしたこと、たくさんの方の方に助けられ励まされながら学校まで避難したこと。家の脇の通学路を歩いて学校に通う子どもたちが可愛らしくて仕方がないこと、寒風沢

にあった小学校に渡し船で通っていたこと、結婚生活二年足らずで夫を戦争で失い、その後は家族一丸となって必死に頑張ってきたことなど、その当時の様子が目に浮かぶようにいきいきとお話ししてくださった。時に「おしゃべりばあちゃんだから」と笑顔で語り、時に涙を浮かべながら真摯にお話しいただいた姿に、この記憶をしつかりと残していきたいと強く感じた。

「ノゾキミ帖」という手法

こうして集めた面白い話は、「ノゾキミ帖」というシートにまとめている。「ノゾキミ帖」は、一テーマにつき表裏両面の一シートで構成している。表面に掲載するその資源の概説的な説明は、「地質」「自然」「生活」という三つの要素のつながりを意識し、ストーリー性を持たせるように心がけている。裏面には取材を通して集めた三つの体験談や裏話を中心にまとめていく。これらを通して、ガイドブック

で紹介した浦戸諸島の魅力をさらに面白く高めることを目指している。

また、シートに掲載している話が、誰に聞いた内容なのかを明記することで、ゆるく人材リストの役割も果たし得るように工夫している。これは、学校の先生からのアドバイスによるものである。「ノゾキミ帖」は資源の深掘りだけではなく、人材リストの役割も果たすものである。

また、さまざまな使い方が可能なことも特長である。今年度の三つの取り組みを進めるにあたっては、どのような点を工夫すれば「ノゾキミ帖」が役に立つか、という視点で取り組んでいる。そのため工夫については、次からの使用例の中で紹介したい。

使用例①

夏休みの勉強合宿との連携

教育委員会からは、夏休みの勉強合宿における「浦戸学習の時間」の内容を充実させるために、連携できるのではないかと意見を出した。東日本大震災の生の経験を実

実際の現場で語り継ぐことで、避難訓練を充実させることを目的とした。

先に、「ノゾキミ帖」はさまざまに活用が可能であると述べたが、その一つがガイドの際の「あんちよこ」としての活用である。解説をより上手に伝えるために、話の切り出し方や用意する小道具のヒントなど、実際の解説時に役立てることを目指してさまざまな工夫をしている。

具体的な内容については、当日にガイドを担当される野々島にお住まいの方と作成を進めた。「家が流されていく様子を見たくないという気持ちもあり、熊野神社から学校への避難を決めた」「熊野神社に避難してから学校に避難するまでの間の出来事は、はっきりと思い出すことができる」「など、当時の避難の様子やその時の感情を詳細に語る様子はとても迫力と臨場感があり、多くの子どもたちに聞いてもらいたいと思った。

準備を万端に整え、あとは実施を待つだけだった。ところが、台風が近づいたために勉強合宿自体が中止となってしまった。本来であれば、

ガイド用の「あんちよこ」として足りない所をあぶり出したかったのだが、それはまたの機会に譲ることになってしまった。

今年度は実施できなかったが、浦戸諸島での勉強合宿は本土の子どもたちが浦戸諸島を訪れる貴重な機会である。「ノゾキミ帖」が、浦戸の奥深い魅力に触れるきっかけになればと考えている。

使用例②

総合的な学習の時間との連携

島の学校の意見では、演劇活動の事前学習にガイドブックを活用したいとのことだった。

子どもたちが、自分たちが演じる演劇への理解を深めるため、「浦戸合宿」という授業の中で島の方に取材を行い、その学習成果を壁新聞やパネルにまとめていくとのことだったので、子どもたちの取材の様子を逆取材する予定となっていた。地域の人が浦戸諸島のことを子どもに教える仕組みづくりを目指していたが、これも雨のために残念ながら中止となってしまった。

今年初めて公演を見ることができた。子どもたちの熱演は本当に素晴らしい。「自分のやるべきことは何なのか」を改めて考えさせられる大切なきっかけとなった。公演終了後、演劇の背景にある浦戸諸島の魅力と、演劇そのものの魅力をさらに伝えるために、何かできることはないだろうかと考えた。

事前学習において島の方への取材結果を「ノゾキミ帖」としてまとめ、その「ノゾキミ帖」を基に同じメッセージを有する演劇とエコツアーを実施することで、観客は子どもたちが演劇を通して伝えたかったメッセージや、演劇にあたっての子どもたちの努力といったものを、より深く理解することができるようではないだろうか。

使用例③

うらとのウラガワツアーの実施

浦戸振興課からは、「ガイドブック『うらとのウラガワをのぞこう！』が好評だったので、ぜひ『うらとのウラガワツアー』を実施したい」という要望をいただいた。

その準備として、東北を代表するエコツーリズム先進地である田野畑村へ視察を行い、漁船を活用したプログラム「サツパ船アドベンチャー」を体験した。体験乗船を終えた浦戸の方々は、北山崎の圧倒的なスケールに感動しながらも、「浦戸諸島にはまた別の良さがある」と、浦戸諸島ならではのツアーの実現に燃えていた。

事前の検討会・練習会を経て、十五日に島内で活動中の諸団体を招き、「うらとのウラガワをのぞこう！ 交流体験ツアー」だんべっこ船で巡る浦戸諸島エコツーリズム」と題したモニターツアーを催行した。

この「だんべっこ」という名称は、浦戸諸島をはじめ松島周辺で用いられている小型漁船を指す呼び名で、サツパ船よりも船べりが低い船である。サツパ船アドベンチャーズに学びながらも、浦戸諸島ならではの魅力を大切にしようという心意気がここにも表れている(写真6)。

壁も屋根もないだんべっこ船に乗ると、市営汽船とは比べ物にならないくらい間近に浦戸諸島を感じるこ



写真6 だんべっこ船で手掘りの洞をぐり抜ける(島では洞穴のことを「ボラ」と呼ぶ)(高橋葉子撮影)

とができた。市営汽船ではどうしても「お客様」にとどまってしまうものが、だんべっこ船に乗ることとて、島の人の目線で浦戸諸島を見つめることができたように感じた。

今回は、モニターツアー催行までの動きがかなり早かったため、「ノゾキミ帖」を事前にまとめることができなかつた。モニターツアー時の解説内容を「ノゾキミ帖」としてまとめながら、今後も使えるようにしていきたい。また、「ノゾキミ帖」には関連テーマという欄を設けている。関連テーマ同士を組み合わせて、

より広がりのあるプログラムづくりの参考にも行うことを目指しているものだが、こうした部分を活用することで、だんべっこ船ツアーそのものもより面白いものにしていただけたらと願っている。

ここに紹介した使用例は、あくまで「ノゾキミ帖」の活用例の一部だと考えている。浦戸諸島では多くの団体がさまざまな活動をしている。こうした団体や島の方にも積極的に「ノゾキミ帖」を作成・活用していただき、よりたくさんの方に、より奥深い浦戸諸島の魅力をどんどん伝えていってもらいたいと願っている。「ノゾキミ帖」の具体的な活用方法と今後の作業体制については、これから島の方と一緒に考えていきたい。

浦戸諸島がエコツアー ズムに取り組む意義

だんべっこ船に乗った時、島の人が見ている世界をのぞくことができたと感じると同時に、東日本大震災により浦戸諸島が失ってしまったモ

ノヤコトの大きさを強く感じた。

浦戸諸島は、東日本大震災以前から過疎化と少子高齢化が進み、深刻な問題となっていた。そこに津波の被害を受けたことで、島に伝わる多くの貴重なものが失われてしまった。人やモノがなくなってしまうつあることで、古来、積み重ねられてきた「島の記憶」が失われかねないという危機的状況にある。

「ノゾキミ帖」として貴重な思い出を文字にまとめていくことにより、それ自体が貴重な「アーカイブズ」の役割を果たすことになるだろう。しかし、ただ文字としてまとめただけでは、いざれ図書館の片隅で誰の目にも留まることなく、埋もれていってしまうのではないだろうか。「ノゾキミ帖」の最大の特徴は文字として記録したものを、実際の活用場面を想定しながらまとめていることである。ガイドツアーの実施や学校教育での活用など、「ノゾキミ帖」を現場でしっかりと活用していくことができれば、島の記憶はより確かで強固なものになるかもしれない。

ここに浦戸諸島がエコツアーズム

に取り組む最大の意義があるだろう。浦戸諸島がエコツアーズムに取り組むことで、島の内外に笑顔が増えることを目指し、この仕組みがしっかりと根を下ろせるよう、精一杯携わっていきたくと考えている。

子どもの頃から江戸の人の暮らしが好きで、大学で日本史を専攻してきた私の人生の目標は、「歴史の面白さを一人でも多くの人に伝えること」です。当財団を就職先に選んだのも、観光を通じて、地域の歴史や文化の面白さを、多くの人に伝えることができると思ったからです。

ですが、財団職員である以上、自分が当事者となって直接旅行者に伝えることはできません。求められているのは、あくまで地域の方の頼れるサポート役として、適切なお手伝いをするこゝなのです。

今回、こうした機会をいただいたことをきっかけに、自分なりの方法で「地域の文化を伝える」ということに少しでも貢献できたのであれば幸いです。

(かじわき まみ)